



日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

東アジア海文明の歴史と環境

ニューズレター

# 海雀



## Umi-Suzume

第5号

2008. 6. 25

「四川大地震の波紋～四川文明・東アジア海文明との関連」 鶴間和幸 .....	(2)
「国際シンポジウム『東アジア海文明の広がりと変容—渤海・黄海の文化交流—』 (平成19年度第3回東アジア海文明セミナー)の開催」 鐘江宏之 .....	(3)
「愛知県陶磁資料館調査記」 下田誠 .....	(4)
「足利学校における「釋奠」の見学」 中西大輔 .....	(5)
「東京滞在記」 鄒怡 .....	(6)
「東京滞在記」 李志淑 .....	(7)
「海の正倉院「沖ノ島」の大祭」 鶴間和幸 .....	(9)
「中国調査記」 李相勲 .....	(10)
論文リスト .....	(10)
彙報 .....	(13)
編集後記 .....	(15)

学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1 tel: 03-3986-0221(内線5743)

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

## 四川大地震の波紋～四川文明・東アジア海文明との関連

学習院大学文学部教授 鶴間和幸

5月12日マグニチュード8.0の大地震が四川省を襲った。私自身1995年1月17日に体験した阪神淡路地震の32倍のエネルギーであったというから、その揺れのすさまじさは想像を絶する。6万を超えた犠牲者の冥福をまずお祈りしたい。

昨年9月私は2010年の四川文明展の準備で成都、綿陽、什邡の各市を訪れ、展示品のリストアップ作りをしていた。今回こうした都市がことごとく大きな被害に遭った。現地の情報を集めたが、幸い博物館関係者の無事が判明し、まずはほっとしている。

今回の地震の震源地は汶川<sup>びんせん</sup>付近にあり、中国では汶川地震と命名された。ここからの揺れが都江堰市から東北の青川附近まで300キロにわたって幅40キロの断層を大きく動かしたという。四川省の地図にこの断層を記入し、古代の史跡の分布を重ね合わせて見ると、この龍門山断層が四川の豊かな文明を生み出していた不思議さに気づく。

四川省の面積は重慶直轄市が除かれたので、38万平方メートルと日本とほぼ同じ面積である。人口は8000万、内陸に日本のような国がすっぽりと入っていると考えてよい。日本が海に囲まれた海域国家であれば、四川は山岳に囲まれた内陸国家のようなものだ。内陸国家といっても閉ざされた世界ではない。衛星画像を見ても四川盆地は私たちのイメージの盆地をはるかに超えた広大な平原（四川平原）である。中国一の大河・長江に注ぐ4つの支流の河が平原をゆったりと流れる。四川の名称の由来である。岷江<sup>びんこう</sup>・沱江<sup>たこう</sup>・涪江<sup>ふうこう</sup>・嘉陵江の4つの大河はどれも龍門山断層から四川盆地に流れ込んでいる。その水と豊かな土壌が森林を育て、水田を生み出す。そのような自然と人間の営みが四川文明というものを生み出した。

今回被害の大きかった都江堰は、断層から平原に注ぐ岷江の水をコントロールする要であり、大都市成都の生命線である。四川省第2の都市である綿陽も、断層から流れ込んだ涪江のほとりにある。龍門山断層に平行して四川盆地には大きな都市が一列に並んでいる。成都・広漢・徳陽・綿陽・広元の各市である。断層上には汶川・北川・青

川といった共通した地名が見える。「川」は断層を流れる峡谷を意味するのであろう。それらは盆地の平原の大都市を見下ろす地にあり、アバチベット族・チャン族自治州や北川チャン族自治州などチベット族の居住地が広がっていることも見逃せない。

2010年の展覧会では、成都市から広漢市・什邡市・綿陽市・青川県と北上するラインから出土した文物を展覧しようと考えていた。ちょうど龍門山断層に平行するラインは、歴史的にも重要な史跡が立ち並ぶ。古代蜀の文物としては三星堆の青銅仮面、金沙の新出土の黄金仮面、成都市商業街の戦国蜀墓の船棺遺跡の漆器、土器、什邡市博物館所蔵の船棺葬出土青銅器、成都市文物考古研究所蔵の青川県戦国墓出土の漆器群、秦漢時代の文物としては綿陽市博物館所蔵の双包山漢墓出土漆器兵馬俑、成都市文物考古研究所蔵の青銅製車馬などを展示する予定でいたが、今回の地震で被害がどの程度あったのか、情報を少しずつ集めているところだ。成都市文物考古研究所や綿陽市博物館では職員も文物も無事であったとの連絡をもらっている。

私たちの東アジア海文明の調査には東方大平原の広大な平原が対象に入っている。1976年に24万人もの犠牲者を出した唐山地震は、北京の東、大平原の北端の海に近いところで起こった。私たちの災害班も今回の経験を是非研究に取り込んでいきたいものだ。四川盆地も東方大平原も共通する環境をもっている。



汶川市街（2002年撮影）

## 国際学術シンポジウム 『東アジア海文明の広がりの変容—渤海・黄海の文化交流—』 (平成19年度第3回東アジア海文明セミナー)の開催

学習院大学文学部准教授 鐘江宏之

季節が冬から春へと向かいつつある2008年2月24日、標記のシンポジウムを開催することができた。今回のシンポジウムは、学習院大学西2号館201教室を主会場として報告と討論を行ったほか、同じフロアでポスター展示を行い、本事業での調査成果をあわせて報告する機会も設けることができた。

当日は、韓国古代史、日本考古学、アジア史の3分野から、東アジア海、ことに渤海・黄海と関係する視点から個別の報告をいただき、司会進行は鐘江がつとめた。報告では、韓国の古代国家体制における中国官僚制の影響、古代における韓国と日本に共通した築堤開田の技術と中国との関係、さらに中国唐代におけるソグド人の活動と渤海・黄海沿岸地域の関係など、本事業で研究者の相互認識を高め

ていく上で恰好の内容が提示された。

討論では、中国古代史の立場から鶴間和幸教授、さらに日本古代史の立場から鐘江がコメントを述べ、その後に3人の報告者が相互の問題関心に沿って質疑を行う形をとったが、多くの刺激あるやりとりがなされ、学术交流の点で非常に実りある催しとなった。また、参加者も遠くは九州からの方も含めて68名を数え、盛会であった。

今回のシンポジウムでは、主会場に設置したテレビ会議システムを使って韓国の慶北大学校とも中継し、韓国でも同時に別室で参加することが可能となった。討論では、慶北大学校会場からの質疑参加も同時進行で行うことができ、テレビ会議システムの有用性があらためて示された。

### シンポジウムプログラム

コーディネーター 鐘江宏之 (学習院大学文学部)

報告 李文基 (慶北大学校師範大学)

「4～5世紀高句麗・百済における国王幕府の内朝的性格—韓国古代国家における中国制度の変容の一事例—」

小山田宏一 (大阪府教育委員会)

「日本臨海部の開発方式」

森部豊 (関西大学文学部)

「内陸アジア世界の変動と渤海地域—4～9世紀におけるソグド人の東方活動を中心に—」

ポスター報告

討論 (コメンテーター 鶴間和幸 (学習院大学文学部))



シンポジウム会場 (小山田報告)



ポスター報告

## 愛知県陶磁資料館調査記

学習院大学 PD 共同研究員 下田 誠

2008年1月13日、私たちは中国水中考古学成果展（2009年4月開催予定）の事前打ち合わせと、中国陶磁資料の調査をかねて、愛知県陶磁資料館を訪問した。参加者はアジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」プロジェクト（以下、本事業と略称）の派遣として、福島恵氏・矢沢忠之氏・河野剛彦氏が参加し、東洋文化研究所研究プロジェクト「東アジア前近代における文化交流の展開」（代表：鐘江宏之氏）の派遣として鶴間和幸氏と下田が参加した。

愛知県陶磁資料館は1978（昭和53）年、瀬戸市の一角に県政100周年記念事業の一つとして建設されたという。猿投焼・瀬戸焼・常滑焼など、やきものの故郷として、日本全国・世界の陶磁器文化を総合的に紹介する。そのスケールと展示品の量には圧倒される。

今回の訪問では、主任学芸員の森達也氏のご厚意により、常設展示の参観に先立ち、個人所蔵家よりの寄託資料を拝見する機会を得た。漢代の鉛釉陶器には、壺やかまど、犬など漢代人の暮らしを伝える資料が並んだ。鉛に酸化鉄を加え焼成すると赤茶けた色になるようだ。

そのほか東晋で発展したという鶏頭壺や北齊で出現したという三彩、北齊の陶俑など貴重な資料を拝見した。

引き続き、私たちは常設展示を参観した。第三展示室には日本陶磁の歴史が紹介されており、その全貌について実物資料を通じて知ることができる。私は2006年度と2007年度、本事業の交流ネットワーク班の企画による日本海沿岸の交流史跡をめぐる共同調査に参加し、珠洲焼や越前焼などのやきものに接してきた経験から、当コーナーの展示に釘付けとなった。2006年度、十三湊では、珠洲焼が史跡の編年に役立っていた。志苔館の大甕には珠洲焼のものと越前焼のものが使用されていた。その甕の中から40万枚もの古銭が出土したことで話題となった。そうした日本各地のやきものを一同にそろえ、紹介されているおかげで、改めて全体（縦軸としての日本陶磁の歴史、横軸としての全国各地のやきもの文化）の中で調査地の資料を位置づけることができた。

第四・五展示室では中国陶磁を中心に参観した。昨年10月、私は韓国大邱の嶺南大学校において「日本における『東アジア世界』論の展開—東アジア海文明史の試み—」と題する発表をおこない、前述の共同調査の成果をふまえ、十三湊における14世紀中頃から15世紀中頃の貿易陶磁の組成の展開に注目していた（『東亞人文學』第12輯、2007年所収）。龍泉窯系青磁は15世紀中頃以降、日明貿易再開にともない、増加するとされている。中国陶磁史の中で再び、検討を進める機会を得られたことは収穫だった。

本館における展示のほか、古窯館では敷地内から発掘された平安時代から鎌倉時代の竈を展示し、また室町時代（16世紀）に瀬戸や美濃で使用されていた大窯と江戸時代の登窯（19世紀）の復元古窯もある。南館では陶磁産業の現在と未来を紹介し、西館ではこま犬を展示していた。展示品とその内容はきわめて豊富である。

私たちは参観の疲れを茶室陶翠庵で癒した。ここでは陶芸作家の茶碗を使用して抹茶をいただくことができる。私は天目茶碗で抹茶を味わった。

参加者は13日、名古屋にて解散したが、私は1日帰宅を延ばして、名古屋市蓬左文庫を訪問した。蓬左文庫には、学習院大学同様、慶長古活字本『史記』を所蔵しており、実際に閲覧し、装丁・文字などを観察した。以上をもって、調査報告にかえたい。



愛知県陶磁資料館

## 足利学校における「釋奠」の見学

学習院大学大学院博士後期課程 中西大輔

栃木県足利学校孔子廟で2007年11月22日に行われた「釋奠」の儀を見学した。前年の佐賀県多久の多久聖廟に引き続いての調査である。足利学校は奈良（あるいは平安）時代から国学として知られ、戦国時代には「坂東の大学」と称された関東最高の学府であった。江戸時代には最高学府の地位を江戸の昌平黌に明け渡したが、貴重な典籍を多数所蔵することで知られていた。

その孔子廟で行われていた「釋奠」とは、孔子とその弟子を祀る儀式である。『礼記』文王世子篇に「凡始立學者、必釋奠于先聖先師、及行事必以幣。」とあり、儀式の由来は春秋戦国時代にまで遡る。「釋」と「奠」はともに「置く」という意味であり、供え物をするということである。古くは漢の高祖が淮南王黥布を征討した帰りに魯に立ち寄って、孔子を祀ったという記録（『漢書』高帝紀下）がある。また、『後漢書』には後漢時代の「釋奠」の儀式の様子を示す以下のような記述がある。

元和二年（八五）の春、帝は東に巡狩し、還りて魯を過ぎ、闕里に幸し、太牢を以て孔子及び七十二弟子を祀り、六代の樂を作り、大いに孔氏の男子二十以上の者六十三人を會し、儒者に命じて論語を講ぜしむ。  
（卷七十九孔傳伝）

これは、章帝が巡狩の帰途に魯を通った際、孔子の故郷闕里に立ち寄り、牛・豚・羊の犠牲を捧げて孔子及び七十二弟子を祀り、六代（黄帝・堯・舜・禹・殷・周）の音楽を演奏し、孔子の子孫を集め、儒者に『論語』を講じさせたということである。二千年近く前の後漢時代に、既にこのような大規模な儀式が行われていたのである。その後、「釋奠」は太学で行われる国家的な儀式となった。

日本に「釋奠」が伝わったのは大宝元年（七〇一）のことで、大学寮で春秋の二回行われ、大学頭が儀式を掌ったという。足利学校における「釋奠」は室町中期の関東管領

上杉憲実の復興の頃には行われていたようで、現在用いられている祭器の一部はその頃のものとする。

儀式の次第は以下の通りである。

開式→盥漱→昇堂→祭官再拜→掌事告辞→大麻行事→迎神の儀→供饌の儀→祭官跪座再拜→献香→祝文朗読→祭官再拜→賜酢飲福→送神の儀→掌事告辞→閉式

儀式は、祭官は神主スタイル、演奏される音楽は雅楽という、日本風にアレンジを加えられたものであった。孔子と顔子・曾子・子思・孟子の四配の他に足利学校の創設者といわれる小野篁の像にも酒が供されていた。儀式の参加者は事前申し込みで百名程であった。全盛時の足利学校ではこの数倍の規模で儀式が行われていたことであろう。

毎年、こうした中国由来の伝統儀式が行われていることを知り、見学できたのは大変有意義なことであった。今後は曲阜に代表される本場中国の「釋奠」を見学し、日本との異同比較などができれば良いと思う。



釋奠会場風景

## 東京滞在記

復旦大学中国歴史地理研究中心専任講師 鄒 怡

日本の東洋史学研究は、世界的に見ても高い水準にある。その特色としては、豊富な史料の提示やきめ細かい論証が挙げられる。また日本人研究者の多くは積極的に中国へと赴き、フィールドワークや文献調査などを行うことで研究をさらに深く掘り下げている。多くの中国人研究者も、文献資料を探すために日本へとやって来ている。日本は大学図書館などの文献所蔵機関での閲覧サービスが整備されているため、中国では見ることが難しい多くの貴重な史料を見ることができるためである。

ここで疑問に感じるのは、なぜ日本の東洋史学研究のレベルが高いのかという点である。当然のことだが中国は東洋史学の研究対象そのものであり、基礎的な史料の所蔵数は日本と比べても決して少ないわけではない。もしかすると研究のレベルは所蔵されている史料の量や質に依るのではなく、むしろ研究の展開方法にあるのではないか。そしてそこにこそ、日本の東洋史学研究が優れた業績を得ている手がかりがあるのかもしれない。今回、私は鶴間和幸教授の研究プロジェクト「東アジア海文明の歴史と環境」に参加する機会に恵まれた。プロジェクトの運営に近い立場に身を置くことで、日本の学界における研究方法に触れることが出来た。

近年、日本では多数の国や機関から研究者が参加・連携して共同研究を行うという方法が主流となっている。本プロジェクトを例に上げると、学習院大学が中心となり、日本国内の協力関係者に、東海大学情報技術センター・東京大学東洋文化研究所・国立歴史民俗博物館・関西大学文学部など六つの研究機関がある。中国側は復旦大学を拠点として、ほかに八つの協力研究機関がある。韓国側は慶北大学を拠点として、六つの協力研究機関がある。

このように、本プロジェクトの研究者はさまざまな国と研究機関から集まっている。彼らは各々が受けてきた学術的素養や育った環境が異なるので、同じ研究テーマに対してそれぞれの特徴を持った考察を進めることとなる。例えば、筆者の専門である明清社会経済史研究の分野においては、中国農村社会をテーマとする日本人研究者は、中国人研究者に比べて農村の郷紳層と水利組織を重視する傾向が

ある。実はこれは日本人研究者が中国を観察する際に、自身の持っている「日本における農村社会の構造」を投影することで生じる視点であった。これは研究手法や姿勢などから来る違いではなく、研究者の育ってきた教育環境や経験によって生じるものであり、個別に研究を進めているだけでは気づかないことだろう。

学術は、安定した学説の伝承によって絶え間なく克服されていくものである。日本の学界は、研究プロジェクト固有の目標を目指すと同時に、研究指導者の育成にも配慮している。どの国の学界においても、学術的人材の育成は「百年の大計」と言われるくらい大事だと考えられてはいるが、具体的なやり方が異なり、その効果も全く同じというわけではない。若手研究者を育成するポイントの一つは、実地訓練と研究費用の獲得である。まだ博士課程にある大学院生は、研究プロジェクトの申請にあたって何ら有利な立場にはないものの、指導教授のプロジェクトを利用することができる。教授もまた、大学院生の能力を活用して研究プロジェクトを進めることができるといったように、双方にとって良い結果となっている。本プロジェクトでは数多くの大学院生が参与する中で、それぞれにとって興味のある問題点を見出し、さらに一步進めて博士論文のための研究を切り開いている。この過程において、彼らは文献読解とフィールドワークに必要な能力を養い、同時に大学や研究機関で必須となる事務的な手続きの手法も身につけることとなる。教授のプロジェクトのための経費は、若手研究者が研究活動を続けるうえで必要となるさまざまな能力を育成しているのである。

しかし若手研究者の研究プロジェクトへの参加には、危険性も指摘されている。研究を始めたばかりの段階でプロジェクトに参加すると、研究視野がプロジェクトの範囲内に限定され、そこから視野を広げることが難しくなるという点である。本プロジェクトにおいては、国際・大学間の学術的提携と交流にとりわけ力を注いでおり、これによって前述の危険性を回避できている。注目すべきは、国際・大学間の提携にあたって協力機関から訪れた若手研究者に対する育成が、とりわけ強調されていることである。こ

れは、若手の能力を鍛えて育成するだけでなく、長期に渡って継続可能な研究交流ネットワークの構築を視野に入れているためである。

日本の大学は単なる研究機関ではなく、社会教育の役割も担っている。大学で開催される学術報告会の中に、多くの一般市民が聴講しに来ているのには驚いた。かなり専門的な報告にも関わらず、彼らは熱心に耳を傾けていた。報告後に簡単なアンケートと連絡先の登録を行い、関心を持った市民には継続的に報告会や講座の連絡が送られるのである。私はかつて、日本の安部晋三前首相が論じた自民党の社会的基礎の底上げのための発展戦略に関する文章を読んだことがあり、そこには「一人が一戸に影響を与え、一戸が一村に影響を与える」、と述べられていた。研究・教

育という分野においても、簡単なアンケートという作業は非常に小さな種だが、広く社会へ拡散して学習型社会の現在と未来を育てているのだと感じた。

今回、私は大変幸運にも青年研究員として本プロジェクトに参加させていただき、プロジェクトの実務に参画すると同時に、若手研究者としての有益な薫陶を受けることができた。この短い期間中に、私は日本の方々とともにいくつかの仕事に携わることで、研究計画やより細かい点において大変多くのことを学ぶことができた。私のような研究職についたばかりの新人にとって、今回の東京訪問は今後の私の学術的進歩と大学における研究計画の推進の両面に対して、深く大きな影響を与えてくれたことは疑いない。

## 東京滞在記

慶北大学校講師 李 志 淑  
(イ・ジスグ)

学習院大学は、大部分の韓国人たちにも日本の皇族が通う大学というのが第一印象である。ニュースを通じて日本の皇室の報せに接する時、学習院がよく登場するので、より一層そのように思われる。ふと思い出すこととして、黒田清子(紀宮清子)様の結婚の報せの時に夫の黒田慶樹さんの出身大学と報じられたこと、最近の愛子様幼稚園卒業と小学校入学などがある。周知のように、学習院は皇族と華族のための学校として開校した。現在創立年は1877年としているが、起源はそれよりはるかに遡る。その後、官立から私立、そして財団法人から学校法人にいたるまでの長い伝統をもつ学習院は、華族制度が廃止された戦後にも、依然として華族を中心とした教育機関の性格を多く残している。ここで私は、学習院大学と日本学術振興会の配慮で、2007年9月から1年間留学する機会を与えていただいた。アジア研究教育拠点事業の「東アジア海文明の歴史と環境」という韓中日共同プロジェクトに客員研究員の資格で参加することになったのである。韓国でも住むところがあまり変わることがなかった私にとって、外国での生活はかなりの勇気が必要だった。しかし、このように貴重な時間が与えられたのは良い機会だったので、感謝しつつ東京での生活を始めた。

### 学習院大学史学科の授業の参観

東京到着後すぐに学習院大の2学期が始まり、私は史学科の家永遵嗣教授の配慮で、日本中世史の授業を参観することができた。その授業では鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』の講読が記憶に残った。『吾妻鏡』は鎌倉時代を研究する上で最も基本的な史料で、鎌倉時代に成立した編年体で書かれた歴史書である。この歴史書の一部を1学期のテーマと定めて、各自が準備した部分を現代語に訳して発表した。古語なので読む方法も異なり、人一倍の努力が必要だったが、この授業では歴史書の内容理解はもちろん、古語も学べ、個人発表の後には家永遵嗣教授の指導による関連資料解釈や質問などがなされ、自由な討論が行われた。学部の2～4年生だけでなく、大学院生も一緒に参加して討論を引っ張っていているのが韓国ではあまり見られなかった光景で、新鮮だった。鎌倉時代や室町時代といえは时期的に私の専門である韓国の高麗と同時期で、このたびは専門分野の同時代史について少し理解を深められる機会となったと思う。また、室町幕府將軍の権力論を扱った授業も、東京や東京近郊の現在の地名(地下鉄の駅名など)とともに進められたので、外国人の私には新鮮な

感覚と興味を持たせてくれた。

### SSM(Section Study Meeting) 報告

学習院大学アジア研究教育拠点事業で「東アジア海文明の歴史と環境」という共同研究を進める過程では、若手研究者を含めた多くの研究者たちが集まり、毎月研究報告が開催されている。これがまさにSSM(Section Study Meeting)で、2005年度から現在まで毎月1度ずつ1,2名の報告者によって行われている。私もまたSSMで報告できる機会があり、「高麗時代官人の刑罰について」という題目で今までの学界の研究成果と自分の研究方向について紹介した。唐律と高麗律の関係を含め、高麗時代の刑律制度の様子を把握するための過程の一つとして刑罰事例を分析し、その類型と執行、対応、赦免と復職、その後の動向などについて検討してみた。その日は、さまざまな研究者たちが参席し、関心を持って質問をしてくださり、自由な討論がなされたと思われる。

### 足利学校の訪問

学習院での生活に慣れてきた頃である2007年11月23日に、同プロジェクトのセクションⅡ「東アジア海文明のネットワークと環境」の「思想と知識の交流班」で、東京から北に少し離れたところにある足利学校に行ってきた。栃木県足利市昌平町に位置する足利学校は、その創設については奈良時代から室町時代まで見解が分かれるところだが、日本最古の総合大学ということには異論がない。

足利学校では、日本に現存する最古の孔子廟と1990年に江戸時代中期の姿に復元された学校の門などの建物が国家史跡に指定され、よく管理されている。このたびの訪問は、足利学校で行われる釋奠祭の調査が主目的であった。釋奠祭は孔子廟で孔子とその4名(顔子・曾子・子思子・孟子)の弟子を祭るための儀礼で、主管者の入場で始まり、順序に従って準備した供え物を一つ一つ捧げることが音楽とともに進行する。

私はその釋奠祭を見ているうちに、韓国にも同じ儀礼があることを思い出した。ソウル特別市鍾路区明倫洞にある成均館(高句麗の太学、新羅の国学、高麗の国子監を継ぐ朝鮮時代の儒学教育機関)の大成殿で行なう重要無形文化財「積奠大祭」である。「積奠大祭」孔子と4聖、韓・中の賢人たちの位牌を祭り、春・秋期(陰暦2月と8月)に成均館と地方の234の郷校で同時に行う大きな祭礼であ

る。韓日の積奠大祭と釋奠祭は、衣服、音楽、供え物などの差異はあるが、結局は同じ儀礼である。儒教という韓・中・日共通の文化の歴史と環境についての周到で綿密な研究は、広い視野で東アジアを眺める時に必要なことと思われる。そのような点で、韓・中・日の共同プロジェクト「東アジア海文明の歴史と環境」は、非常に大きな意味がある研究と言わざるをえない。

溝と堡塁で囲まれた足利学校の第一印象は、小奇麗で、教育と学習の出発点として今も多くの方々が訪れているというものであった。「遺蹟図書館」では、足利学校の貴重な図書の保管だけでなく、昔の教科書の展示もしており、また小・中学生対象のさまざまなイベントも実施されていた。勤労感謝の日だったその日には、家族連れの参席が目立ち、私にとっては韓日の儒教の断面を比較してみることが出来る時間となった。

そのほかに東京所在のさまざまな博物館などについての話も多々あるが、このたびは以上で止めておくこととした。ただ、学習院大ゲストルームの向かいにある小さな「切手の博物館」は、個人的に気に入った場所なので、まだ行ったことがない方々には是非お勧めしたい。残りの滞在期間にも、引き続き興味深いことが多く起こりそうで、またそうなることを期待している。最後に、このようにさまざまな経験と研究をできるよい環境を提供してくれた学習院大と日本学術振興会に、心よりの感謝を申し上げます。

※足利学校の釋奠調査に関しては、本誌5ページ「足利学校における「釋奠」の見学」にて紹介されています。併せてご覧ください。



史跡 足利学校跡



## 海的正倉院「沖ノ島」の大祭

学習院大学文学部教授 鶴間和幸

5月27日の沖津宮現地大祭に参加するために前日に福岡に向かった。沖津宮は宗像大社の三宮の一つで玄界灘の沖ノ島にある。沖ノ島は5月の大祭のときだけ200名に限定して一般の参拝者を募る。今回は日本島嶼学会のメンバー8名とともに訪れた。沖ノ島は神湊の沖合49キロメートル、対馬、壱岐に近く、釜山からは145キロメートル離れている。一昨年釜山から高速フェリーのビートル号で対馬海峡（朝鮮海峡）を渡ったときに、右手に対馬、壱岐、左手に沖ノ島が見えた。日本列島から朝鮮半島に渡る航路に位置し、航海上の目印でもあり、航海の守護神としてたごりひめのかみ田心姫神が祀られている。1954年以来3回にわたる沖ノ島学術調査団によって約12万点の文物が出土した。

26日福岡からJR鹿兒島本線の東郷駅で下車し、タクシーで宗像大社に向かった。宗像大社のへつみや辺津宮は3姫神の1ついちきしまのひめかみ市杵島姫神が祀られている。神宝館には沖ノ島出土品が展示されている。

神湊からフェリーで大島に渡る。わずか15分で到着する。大島には宗像大社の中津宮があり、3姫神の1つたごつひめのかみ湊津姫神が祀られている。沖ノ島へは定期航路がないので、大島の漁船に頼らなければならない。民宿の河村に一同集合した。河村の年配の女将の話では、昔の海女は沖ノ島に渡り、大島よりも大きな鮑を自由に取っていたという。

翌朝7時に出港、2時間あまりで沖ノ島の南端の波止場に着いた。島は周囲4キロで、地図上でも米粒のような

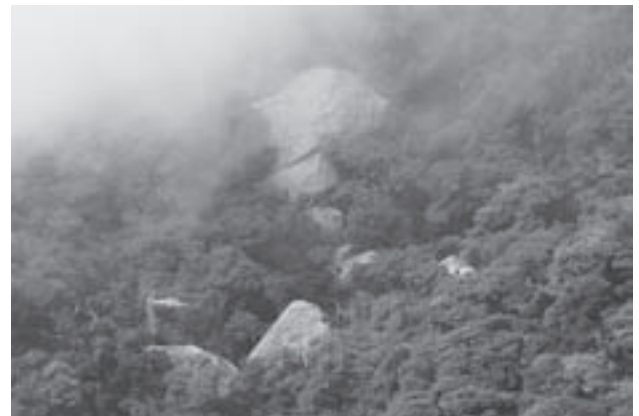
大きさだ。大祭というのは日露戦争の日本海海戦の勝利を祝って始められたものであり、古式ゆかしいものではない。女人禁制、一同禊ぎのために一糸まとわぬ姿で海水に入って首までつかる。島には宮司一人が交替で勤めるだけで、一般の者は立ち入り禁止となっている。宮司の送り迎えも大島の漁船を使うので、漁師は自由に往来できるようだ。沖津宮に参拝したあと、最高峰243.1メートルの一ノ岳の灯台を目指す。晴天であったが、山頂から波止場の方角はもやがかかって見えなかった。西の海面ははっきりと眺望できた。照葉樹林の原生林のなかに巨岩が点在する。この巨岩が古代の信仰の場であった。

巨岩は沖津宮の社を囲むように立ち並ぶ。3回の調査によって23箇所の遺跡が発掘され、祭祀の場所が岩上から岩陰、半岩陰半露天、露天と移動していったことが確認された。4世紀後半から10世紀初頭まで、大和政権の国家祭祀は大陸との関係を反映しながら移りゆく。祭祀では国産品とならべて大陸産の品々が奉納された。漢式鏡・金銅製龍頭（6世紀中葉東魏）・唐三彩長頸瓶（口沿部のみ）は中国産、黄金製指輪・杏葉・步揺付雲珠は新羅産、カットグラス（破片のみ出土）は西域ペルシャ産である。海的正倉院といわれる所以だ。これらは宗像大社神宝館にすべて展示されている。

帰りの船は行きよりも穏やかで静かな海を航行した。初夏の太陽が海面に照りかえり、目にまぶしかった。



沖津宮大祭の禊ぎ



沖ノ島の山頂からの巨岩

## 中国調査記

慶北大学校大学院博士課程 李 相勳  
(イ・サンフン)

8月7日、夜明けには大雨だったが、朝起きると空は青く晴れていた。午後仁川港に着いた後、5時頃には出国手続きを済ませて乗船し、7時に夕食をとった。食事の後、日本側の参加者たちと韓国側の参加者たちが集まって日本酒と韓国ビールを楽しく飲みながら今回の調査に関する話などをした。船上での一日はこのようにして暮れていった。

8月8日の午前、ようやく烟台港に到着した。午前中は烟台天后行官を見学して午後は烟台山一帯を調査した。天気は曇っていてまた海霧のため眺めは良くなかったが、烟台山一帯がこの周辺でもっとも重要な場所であることは一目瞭然であった。その後、烟台から蓬萊に移動した。

8月9日、午前中は登州城一帯を調査したが、まず登州博物館を見学してから黄海と渤海の分界点へ足を運んだ。昔、隋・唐の時代に、高句麗遠征軍がここに集結して遼東半島へ進んでいた時のことを思いながらしばらく感懐にふけた。午後は登州の昔の水路と城郭址を探しに出かけたが、遺跡の周辺にはマンションや住宅の建設などの再開発が行なわれていたため、遺跡に接近することがなかなか容易ではなかった。そして、午後4時頃には新羅館の推定址が調査できた。過去の痕跡はほとんど見つけ出すことができなかったが、今回の調査でもっとも印象に残る場所であっ

た。

8月10日、午前中は蓬萊から烟台に移り、旅客船に乗って大連港へ向かった。雨が降る中、午後5時30分頃になると、遼東半島が見え始めた。翌日の8月11日には、唐と高句麗の激戦地の一つであった卑沙城を調査し、唐軍の上陸推定地も見学した。卑沙城が位置している場所は渤海と黄海が両方眺望でき、また城壁の大部分は絶壁になっていて、天恵の要塞であることがすぐ分かった。

今回の調査で韓・日・中の学者が共同で山東半島と遼東半島の海路・港・遺跡を見回すことができた。また調査主催側の配慮で新羅館と卑沙城を調査する機会を得ることができて、個人的にも非常に特別な経験をすることができた。ここで、もう一度今回の調査を計画・準備した鶴間和幸先生と村松弘一先生をはじめ、関係者の方々に感謝の言葉を申し上げたい。(翻訳：呉吉煥)

※本調査は、2007年8月7日～8月11日に行われた2007年度セクション1共同調査(連合班)の参加記です。「蓬萊調査記」「蓬萊市内班調査記」「大連大黒山卑沙城遺跡調査記」(ともに『海雀』第4号掲載)と合わせてお読みください。

## 論文リスト

【参加研究者の「東アジア海文明の歴史と環境」に関連する研究成果(アルファベット順)】

◇著作◇

安 介生『歴史民族地理』(上)・(下)、山東教育出版社、2007年12月

傅 林祥『中国行政区画通史—中華民国巻』復旦大学出版社、2007年8月

葛 劍雄『人在時空之間』中華書局、2007年6月

葛 劍雄『歴史上的中国—中国疆域的変遷』上海文芸出版総社、2007年8月

葛劍雄・胡云生『黄河与河流文明的歴史觀察』黄河水利出版社、2007年9月

洪性鳩(共著)『명청시대 사회경제사(明清時代社會經濟史)』도서출판 이산(圖書出版 移山)、2007年5月

- 鐘江 宏之『地下から出土した文字』山川出版社、2007年9月
- 鐘江 宏之『律令国家と万葉びと』(日本の歴史三 飛鳥・奈良時代)小学館、2008年2月
- 李 文基(共著)『백제의 정치체도와 군사(百濟の政治制度と軍事)』충청남도역사문화연구원(忠清南道歴史文化研究院)、2007年6月
- 李 文基(共著)『한국고대사의 새 동향(韓國古代史研究の新動向)』서경문화사(書景文化社)、2007年7月
- 下田 誠『中国古代国家の形成と青銅兵器』汲古書院、2008年2月

## ◇論文◇

- 安 介生「自然災害・制度缺失与伝統農業社会中的‘田野陷阱’」『陝西師範大学学报』2007年第3期
- 安 介生「明代北方災荒性移民研究」『《田祖有神：明清以来的自然灾害及社会应对机制研究》论文集』、上海交通大学出版社、2007年7月
- 安 介生「略論先秦至唐代閩隘体系構建的時空進程」『歷史地理』第22輯、上海人民出版社、2007年12月
- 安 介生「晋学研究之三部論」『晋陽學刊』2007年第5期
- 張 東翼「중국, 일본 문헌의 고려왕조 관련기록과 고려사(中國、日本文獻の高麗王朝關聯記錄と『高麗史』)」『한국중세사연구(韓國中世史研究)』23、2007年10月
- 傅 林祥「遼朝州郡制度新探」『歷史地理』第22輯、2007年12月
- 葛 劍雄「从歷史地理看長時段環境變遷」『陝西師大學報』第36卷第5期、2007年9月
- 濱川 栄「范蠡と莊生一『史記』越世家小考一」『福井重雅先生古稀・退職記念論集』汲古書院、2007年4月
- 韓 昭慶「試論三江源生態移民的文化變遷」『復旦學報』2007年第3期、2007年6月
- 韓 昭慶「貴州石漠化人為因素介入的起始界面試析」『<歷史上的環境与社会>論文集』三聯書店、2007年10月
- 韓 昭慶「青海的早期现代化及其地理因素」『歷史地理』第22輯、上海人民出版社、2007年12月
- 長谷川順二「前漢期黄河故河道復元—河南省武陟~新鄉~衛輝~滑縣—」『中国水利史研究』第35号、2007年10月(黄河下流班2006年度の調査報告)
- 洪 性鳩「청조의 종족정책에 대한 재검토 - 족정제를 중심으로 - (清朝の宗族政策に関する再検討 - 族正制を中心に -)」『중국학보(中國學報)』55、2007年6月
- 家永 遵嗣「동아시아의 海洋世界 와 일본의 中世 (東アジアの海洋世界と日本の中世)」『歷史教育論集』第39輯、2007年8月
- 任 大熙「중국 고대 관료의 수회죄에 대한 규정과 적용사례 (中國古代官僚の收賄罪に関する規定と適用事例)」『법학논고(法學論攷)』26、2007年8月
- 任 大熙「傳統中國法中關於‘罵詈’相關法律規定的變遷」『中華法系國際學術研討會文集』2007年10月
- 菅野 恵美「墓葬裝飾における祥瑞図の展開」『東洋文化研究』第10号、2008年3月
- 柏倉 伸哉「在秦国雍城地区的六国文化和移民」前掲中国史学会第8回國際學術大会
- 小山田宏一「敷葉工法の再検討—天然素材を用いた土構造物の補強—」『季刊 考古学』102号 2008年1月
- 小山田宏一「東アジアにおける天然素材で補強する土構造物の技術系譜」『大阪府立狭山池博物館研究報告』5、2008年3月
- 李 文基「7세기 高句麗의 軍事編制와 運用 (7世紀高句麗の軍事編制と運用)」『高句麗研究』27、2007年6月
- 李 文基「新羅 孝恭王(曠)의 出生과 王室의 認知時期에 대하여 (新羅孝恭王(曠)の出生と王室の認知時期に関して)」『新羅文化』30、2007年8月
- 李 文基「新羅 孝恭王(曠)의 太子冊封과 王位繼承 (新羅孝恭王(曠)の太子冊封と王位繼承)」『歷史教育論集』39、2007年8月
- 滿 志敏「宋代吳淞江白鶴彙与盤龍彙一帶河道演變」『歷史地理』第22輯、2007年12月
- 村松 弘一「古代東アジア史における陂池—水利技術と環境—」『中國史研究』第49輯、2007年8月

- 中村 威也「關於秦漢時期的非漢族社会及中央政府的支配」前掲中国秦漢史研究会、第三分科会（考古）報告 10 番
- 下田 誠「日本における＜東アジア世界＞論の展開」『東亞人文學』第 12 輯、2007 年 12 月（交流ネットワーク班 2006 年度の調査報告）
- 諏訪 哲郎「國際化時代における日本の地理教育」『東洋文化研究』第 10 号、2008 年 3 月（刊行予定）
- 高柳 信夫「近代中国에서의 進化論의 導入— 嚴復（1854～1921）을 一例로 하여」（近代中国における進化論の導入— 嚴復（1854～1921）を一例として）『歴史教育論集』第 40 号、2008 年 2 月（刊行予定）
- 鶴間 和幸「中国古代と東アジア海文明」中国秦漢史研究会第十一届年会暨國際學術研討会、長春市前進大厦、論文番号 21、2007 年 7 月 27 日
- 鶴間 和幸「東アジア海の文明を求めて」『学習院史学』第 46 号、2008 年 3 月
- 上野 祥史「対漢墓多角度研究的探索—長沙地区的西漢社会」中国史学会第 8 回国際學術大会（第 56 回學術発表会）『通過出土文物看中国史（출토문물을 통해서 본 중국사）"Chinese History understood through Excavated Cultures" International Conference』2007 年 9 月
- 禹 仁秀「조선 후기 경상우병영의 문서 포장과 呈家式（朝鮮後期慶尙右兵營의 文書包裝と呈家式）」『歴史教育論集』第 39 輯、2007 年 8 月
- 禹 仁秀「사미헌 장복추의 문인록과 문인집단 분석（四未軒張福樞의 門人錄と門人集團分析）」『語文論叢』2007 年 12 月
- 禹 仁秀「자암 이민환의 시대와 그의 현실대응（紫巖李民奐의 時代と彼の現實対応）」『자암 이민환의 문학세계（紫巖李民奐의 文學世界）』2007 年 11 月
- 禹 仁秀「고령 매촌동약의 특징과 동민의 결속（高靈梅村洞約의 特徵と洞民의 結束）」『역사속의 고령과 고령사람들（歷史の中の高靈と高靈人たち）』2007 年 12 月
- 楊 偉兵「制度變遷与地域社会：清代雲貴地区改土歸流和民族生態變遷」『《人類社会經濟行為環境的影響和作用》論文集』三秦出版社、2007 年 4 月
- 楊 偉兵「旱澇・水利化与雲貴高原農業環境（1659—1960）」『《田祖有神：明清以来的自然灾害及社会应对机制研究》論文集』、上海交通大学出版社、2007 年 7 月
- 楊 偉兵「宣統雲南統県政区数目考」『歴史地理』第 22 輯、2007 年 12 月
- 楊焜達・滿志敏・鄭景云：Reconstruction of series in later or earlier of rainy season in Yunnan and evolvement of summer monsoon Journal of Geographical Sciences（地理学報英文版）Vol.17（2007）
- 楊焜達「清咸豐六年長江三角洲地区旱災氣候背景分析」『氣象与減災研究』第 30 卷第 3 期、2007 年
- 楊焜達「清代檔案中氣象資料的系統偏差及檢驗方法研究——以雲南為中心」『歴史地理』第 22 輯、2007 年 12 月
- 矢沢 忠之「秦漢時代山東半島の戰国齊の貨幣文化」前掲中国秦漢史研究会、全体會報告 8 番
- 李 相勳「羅唐戰爭期 기벌포 전투에 대하여（羅唐戰爭期伎伐浦戰鬪に關して）」『제 126 차 대구사학회 정기학술대회（第 126 次大丘史學會定期學術大會）』2007 年 4 月
- 張 偉然「《行歷抄校注》商疑—特別是關於入唐留學僧園載的史實」『九州學林』5(1)、香港城市大学中国文化中心、復旦大学出版社、2007 年
- 張 偉然「歸屬・表達・調整：小尺度區域的政治命運——以“南灣事件”為例」『《人類社会經濟行為環境的影響和作用》論文集』三秦出版社、2007 年 4 月
- 張 曉虹「城市化与上海地区市鎮空間結構的演變——以 1870—1937 年真如・羅店為例」『歴史地理』第 22 輯、2007 年 12 月
- 朱 海濱「近世浙江歲時習俗的區域差異」『歴史地理』第 22 輯、2007 年 12 月
- 朱 海濱「僧侶・士人与胡則信仰」『復旦學報』2007 年 6 期、2007 年 11 月
- 鄒 怡「民国市鎮的区位条件与空間結構—以浙江海寧硤石鎮為例（下）」『歴史地理』第 22 輯、2007 年 12 月

## 彙報

## ◇セミナー

第3回：2008年2月24日（日）

「東アジア海文明の広がりと変容—渤海・黄海の文化交流—」

会場：学習院大学西2号館201～203、303教室

\* 報告者・報告題目については3頁を参照。

## ◇セクション・スタディ・ミーティング (SSM)

第15回：2007年11月29日（木）18:00～19:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「高麗時代官人の刑罰について」（李志淑／学習院大学客員研究員・慶北大学校講師）

通訳：呉吉煥（東京都立大学大学院博士後期課程）

参加者：13名

第16回：2007年12月13日（木）18:00～19:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「2007年度海港班調査報告」（中村威也／大東文化大学人文科学研究所兼任研究員）

「清代の薬剤流通について～樟樹鎮薬剤商人の展開を中心に～」（石川晶／学習院大学大学院博士後期課程）

参加者：16名

第17回：2008年1月23日（水）18:00～19:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「2007年度運河班調査報告」（水野卓／専修大学非常勤講師）

「2007年度交流ネットワーク班調査報告」（大多和朋子／学習院大学大学院博士後期課程）

参加者：14名

第18回：2008年3月13日（木）16:00～18:00

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「海を介して広がる民間宗教団体—近代香港の事例を中心に」（小武海櫻子／学習院大学大学院博士後期課程）

「徽州茶業センター屯溪の地位の確立：茶業の周辺産業からの証拠」（鄒怡／学習院大学客員研究員・復旦大学歴史地理研究中心専任講師）

通訳：小武海櫻子

参加者：11名

第19回：2008年5月14日（木）18:30～20:00

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「愛知県陶磁資料館調査報告・水中考古学実習報告」（河野剛彦／学習院大学大学院博士後期課程）

「東周秦漢時期臨淄地区から見た住民と交流の諸相」（柏倉伸哉／学習院大学PD共同研究員）

参加者：13名

## ◇フォーラム

第12回「陶磁器から見た東アジア海文明」

日時：2007年12月3日（月）18:00～20:00

会場：学習院大学北2号館10階大会議室

「中国陶磁から見た東西交流—沈没船引き上げ資料を中心に—」

（森達也／愛知県陶磁資料館学芸課主任研究員）

参加者：37名

第13回「陶磁器から見た東アジア海文明」

日時：2008年5月20日（火）18:00～20:00

会場：学習院大学北2号館10階大会議室

「韓国新安沖・謎の沈船」

（菊池正浩／NHKエンタープライズ・プロデューサー）

参加者：38名

◇出版

【論文】

家永 遵嗣「동아시아의 海洋世界 와 일본의 中世 (東アジアの海洋世界と日本の中世)」『歴史教育論集』第39輯、2007年8月

高柳 信夫「近代中国에서 의 進化論 의 導入— 嚴復 (1854 ~ 1921) 을 一例로 하여 (近代中国における進化論の導入— 嚴復 (1854 ~ 1921) を一例として)」『歴史教育論集』第40号、2008年2月

鶴間 和幸「東アジア海の文明を求めて」『学習院史学』第46号、2008年3月

諏訪 哲郎「国際化時代における日本の地理教育」『東洋文化研究』第10号、2008年3月

【調査報告】

長谷川順二「前漢期黄河故河道復元—河南省武陟～新郷～衛輝～滑県—」『中国水利史研究』第35号、2007年10月 (黄河下流班 2006年度の調査報告)

下田 誠「日本における<東アジア世界>論の展開」『東亞人文學』第12輯、2007年12月 (交流ネットワーク班 2006年度の調査報告)

【シンポジウム論文】

特集：「隋唐期東アジア仏教の宗派意識」(2006年度第2回東アジア海文明セミナー) 『東洋文化研究』第10号、2008年3月

馬淵 昌也「はじめに—“隋唐期東アジア仏教における宗派意識”シンポジウムの縁起と若干のコメント—」

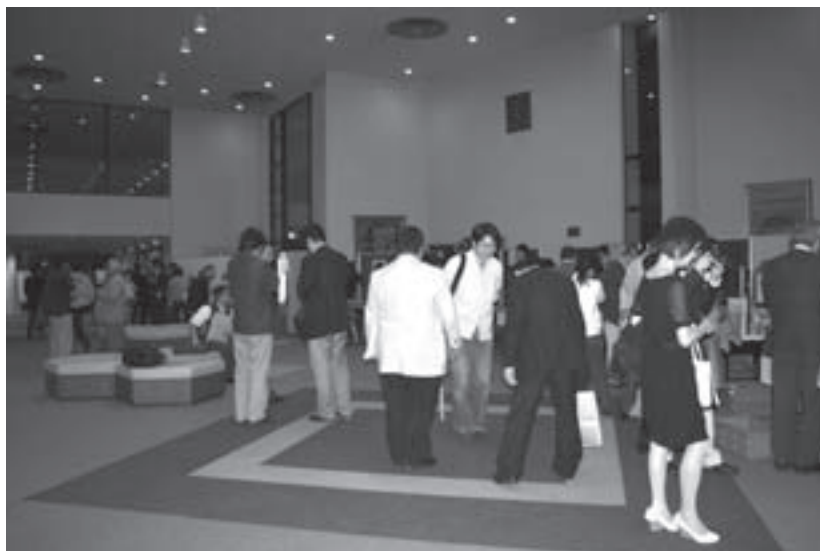
金 天鶴「新羅下代における華嚴と禪の宗派意識」

張 偉然「中国仏教の宗派形態の差異と地理的環境」

陳 引馳「中唐文人の仏教宗派意識—柳宗元を一例として—」

陳 継東「コメント：隋唐時代の東アジア仏教における宗派意識の問題点—凝然撰『八宗綱要』と楊文会撰『十宗略説』の視座を通して—」

林 鳴宇「コメント：日中韓仏教の宗教意識を考えて」  
明史の試み」



チャリティセミナー「四川大地震と四川文明—未来のための歴史と現在—」会場にて(2008年6月12日)

## 編集後記

「四川大地震の波紋～四川文明・東アジア海文明との関連」(2P)でも触れている四川大地震に関連して、学習院大学にてチャリティセミナー「四川大地震と四川文明—未来のための歴史と現在—」を緊急開催致しました(上写真)。詳細は第6号でご報告致します。

第5号では本年2月に開催しましたシンポジウムや現地調査報告、現在インターフェローとして日本に長期滞在中の鄒怡・李志淑両先生にお願いしました東京滞在記などを掲載しました。またプロジェクト参加者による論文リストを併せて掲載しています。ご高覧いただけましたら幸いです。(J.H.)

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

「東アジア海文明の歴史と環境」

ニューズレター海雀 Umi-Suzume 第5号

発行編集：学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

Tel：03-3986-0221 (内線5743)

Fax：03-5992-9218 (人文科学研究所)

e-mail：[asia-off@gakushuin.ac.jp](mailto:asia-off@gakushuin.ac.jp)

HP：<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

発行日：2008年6月25日

印刷：株式会社理想社

